

崇高と力

——ライヒャルトによるクレッシェンド体験報告の思想的背景——

岡野 宏

本稿は、1774年に刊行されたヨハン・フリードリッヒ・ライヒャルトの書籍で提示された、オーケストラによるクレッシェンドの体験に関するある報告が持つ思想的背景を検討する。この検討において、本稿は「音楽的效果」を歴史的に条件づけられた思想的背景の産物として捉える視点を提示する。序では、議論の前提として、音楽的效果の認識論的条件が提示される。即ち、ある音楽作品がある人物の中に生理的ないし心理的な反応を引き起こしたと言えるためには、音楽的刺激と反応を結び付け、それらを一つの総体的な体験として構築するプロセスが不可欠である。この構築において、同時代的な思想的背景が関与するのである。第1節では、ライヒャルトの報告における「オーケストラによるクレッシェンドを聴いている際、聴衆が息をせずに徐々に立ち上がった」という記述に注目し、同種の記述が繰り返り、18世紀後半から19世紀初頭のドイツ語文献に現れていることを指摘する。第2節および第3節では、そうした記述が同時代のドイツの人々に対して説得的なものとして映った理由を検討する。第2節では「人々が息をできなかった」という記述が崇高の一つの類型としての漸進的増大の同時代的理解を反映していることを指摘する。第3節では「人々が徐々に立ち上がった」という記述が計量可能な量としての力の同時代的理解を反映していることを指摘する。第2節における崇高なものとしてのクレッシェンド観と、第3節における増大する力としてのそれはどちらもある種の上昇の感覚を示すものである。しかしながら、それらは異なった人間観を前提としている。前者が人間を主体として理解する一方、後者は客体として理解する。にもかかわらず、それらの矛盾した人間観はライヒャルトの報告において共存しているのである。